



グレースメディカルグループ  
Grace Medical Group

# 在宅医療通信

Vol.2



## グレースメディカルグループ 医療連携事例



CASE1 リハ  訪問看護  医科

リハビリをご利用いただいている患者様のケース

患者様宅へリハビリに入った所、以前と違い下肢(特に右足)が動かなくなり移動困難・寝たきりの状態となっていたため、直ちにケアマネージャー様へ報告し、その後すぐに医科と訪問看護へ情報共有いたしました。

急遽往診した所、特に異常は見られなかったため、訪問看護にてオムツ交換・清拭対応し様子を見ることになりました。

その後、ご家族様よりケアマネージャー様へ日々の介護負担の相談があり、グレースで連携している病院へレスパイト入院する運びとなりました。

後日、ご家族様より『介護負担の軽減』『自宅へ戻ってくるまでの住環境』及び『介護の準備をする時間を設けられた』ことへの感謝のご連絡を頂きました。

患者様の状態に異変を感じた時、グループであるからこそそのスピード感のある連携を発揮できた事例でした。

グレースメディカルグループとしましては、今後も訪問時の患者様の状態の変化【**いつもと違う**】ということを感じ、適切な処置につなげられるよう、ワンチームで患者様をサポートしていきたいと思っております。



グレースメディカルグループ  
Grace Medical Group



## グレースメディカルグループ 医療連携事例



CASE2 医科  訪問看護  歯科

医科・歯科・訪問看護のグレースメディカルグループサービスをご利用頂いているケース

患者様の認知症症状が強く、平日毎日訪問している看護師が、自己での口腔ケアが難しく口腔内汚染が顕著であると判断し、訪問歯科へ無料検診を依頼しました。

すぐに看護師同席で訪問歯科の診察が入り、患者様の口腔ケア方法を歯科医師が指導し、毎日の適切な口腔ケアを看護師が行うことが出来るようになりました。

それにより誤嚥性肺炎を始めとした感染症を予防することにつながりました。

また、訪問歯科で嚥下機能評価も行い、結果的には嚥下は出来ませんでしたでしたが、現在の状態で経口摂取出来るものがないか検討する機会となり、患者様の食べたいというニーズに寄り添うことができ、ご家族にも大変喜んで頂けました。

グループの連携により、患者様の状態悪化を阻止、かつ患者様の要望に応えられた事例でした。

グレースメディカルグループとしましては、今後も患者様の状態の改善、そして患者様ご本人とご家族に【喜んでもらえる】よう、ワンチームで取り組んで参ります。



グレースメディカルグループ  
Grace Medical Group



## グレースメディカルグループ 医療連携事例



### CASE3 医科 歯科 リハ

医科・歯科・リハのグレースメディカルグループサービスをご利用頂いているケース

医科の定期診察時、医師にご家族から以前一時的にパンが詰まり、窒息したかもしれないと報告がありました。

そのため、担当医師より訪問歯科へ連携し、早急にVEを実施することとなりました。

VE後、ご本人の嗜好を伺い食事を見直した所、むせ込みもなくなり徐々にご自分で食事が出来る様になりました。

また、そのことをリハ・ヘルパーへ共有しご家族より大変喜ばれました。

グループ内の各所連携により情報共有、患者様やご家族の安心につながった事例でした。

### CASE4 居宅 歯科 訪問看護

歯科・訪問看護・ケアマネージャーでサービスをご利用頂いているケース

歯科では月に1度の訪問診療の為、日常的に介入している訪問看護からなにかあれば訪問当日に共有出来た事例。

患者様が最近むせる事が多くなってきており、ご家族も心配されているので、歯科での嚥下評価をした方が良いという内容でケアマネージャーに確認し、実際に嚥下内視鏡検査を実施する事になりました。

ケアマネージャー、歯科、訪問看護で連携している事により、情報共有のタイムラグが少なく、迅速な対応が出来た事例でした。

## 【看取る】

住み慣れた場所で最期を迎えたいという方はますます増えている。訪問診療医にとって、その思いにそえるように診てゆくことは重要な仕事となっている。昨年グレースホームケアクリニックに緩和ケア医として再び働くことになった時、そうした思いに出会った。

**92歳**の老衰の男性だった。独居で介護者もない。酷暑で脱水にもなりかけた。施設入所を勧めたが、私の勧めに頷きつつも彼の意思は一貫していた。それは最期までここで過ごしたいとのものだった。支える側としても「何が彼にとって最善か。」を悩みながらも、私たちは想いを叶えようとチームで動いた。彼の表情は常に穏やかだった。だからこそ、なおさら「ここで」との思いは頑なだった。半世紀以上生きてきた彼の部屋は彼の人生そのものであり、そこで今完結しようとしていた。幸いにして、老衰の終末期らしく、治療・ケアを適切に調節することで、つまり過剰な医療は行わないことで、十分な緩和ケアが為され、一貫して穏やかなご様子だった。

最後は静かに旅立たれた。一人の人生の完結の場に立ち会わせてもらったと感じている。

多死社会は続く。死を前にした願いは多様であり、それに添うことは医療者や介護者にとって益々重要となっている。これからも穏やかな人生の完結をグレースホームケアクリニックで支えていきたいと願う。

グレースホームケアクリニック医師 大津 秀一